

第10回全九州オープンアームレスリング大会

君は、世界最速の格闘技を見たことあるか？



TORIUS to BIZ Event Report vol.22

君は、世界最速の格闘技を見たことあるか？

10月11日、トリアスWESTのアミューズメントパーク万代軒下スペースで、JAWA福岡県アームレスリング連盟主催の「第10回 全九州オープンアームレスリング大会」が開催されました。

試合開始まで約1時間となった会場周辺は、アームレスリングの参加者と、万代を訪れたお客さんで、すでににぎわっていました。大会には北は兵庫、南は沖縄から選手が集まり、世界チャンピオンも出場。当日の申し込みを含め、約120人が出場しました。競技は、経験者が技術を競う上級部門から、競技未経験者も挑戦できる素人部門まで、4部門で実施。さまざまな経験や実力を持つ選手たちが、腕一本で勝負に挑みます。



30年以上の歴史を受け継ぎ、 競技の進化を見つめる

「全九州オープンアームレスリング大会」としては、今回で第10回を迎えました。大会を主催するJAWA福岡県アームレスリング連盟の黒土理事長によると、前身となる大会から、台風やコロナ禍による中断を挟みながら、30年以上にわたって続いてきたといいます。



「九州では一番でかい大会と自負しています」

黒土理事長はそう語ります。自身も選手として競技に取り組んできた一人であり、各地の大会で審判を務めてきました。選手として試合に臨む立場と、審判として競技を支える立場。その両方を経験してきたからこそ、選手たちが公平に競技できる環境を大切にしています。

長く競技に携わってきた黒土理事長が、アームレスリングの魅力として挙げるのは、その奥深さです。

アームレスリングの技術は、10年前と比べても大きく変わっています。20年前には知られていなかった技術が、現在では当たり前になっているといいます。競技そのものが進化し続けるなかで、選手もまた技量を高めていかなければなりません。



トレーニング器具にも変化が表れています。以前は一般的なダンベルなどを使って鍛えていましたが、現在は指など特定の部位を強化する専用器具も充実しているといいます。大会の歴史とともに、競技の技術も、選手を支えるトレーニング環境も変わり続けてきました。黒土理事長のお話からは、長い歴史を重ねた今も、アームレスリングが進化し続けていることが伝わってきました。



■ 競技歴もさまざま。それぞれが挑む一瞬の勝負

会場では、試合に臨む選手たちの真剣な表情に加え、互いに声をかけ、挨拶を交わす姿も見られました。長年競技を続けている選手もいれば、競技を始めてまだ日が浅い選手もいます。競技歴が1年未満ながら大会に出場している女性選手に話を聞くと、アームレスリングの魅力は、やはりその奥深さにあるといいます。経験を積み、技術を学ぶなかで、自分の成長を確かめながら挑戦できることも、この競技の魅力の一つです。



さまざまな経験を持つ選手たちが同じステージで、一瞬の勝負に挑んでいました。アームレスリングと聞いて、どんな競技を思い浮かべるでしょうか。腕力自慢がテーブルを挟んで腕を組み、力いっぱい相手の腕を倒す。そんな腕相撲のイメージを持つ方も多いかもしれません。しかし、実際に試合を目の当たりにすると、その印象は大きく変わりました。

アームレスリングは、単なる力比べではありません。相手の力の方向を読み、技術を駆使し、互いに駆け引きを繰り広げる競技です。勝負が決まるのは一瞬。その一瞬のために、選手たちは日々トレーニングを重ねています。



■ 体格だけでは決まらない。勝負を分ける技術と駆け引き

選手によって体格も得意な技も異なり、力の入れ方や手の使い方、試合の組み立て方にも違いがあります。相手の力を受け止めるだけでなく、状況に応じて技を使い分けながら勝機を探ります。

大会に出場していた選手に話を聞くと、アームレスリングの魅力は「日頃やっていることが出せるか出せないか」にあるといいます。練習を重ねて身につけた力や技術を、本番で発揮できるかどうか。それも勝負を左右する要素のひとつです。

また、体格の小さな選手が大きな選手に勝つことも、この競技の面白さです。体格だけでは勝敗が決まらず、技術や試合中の判断が重要になります。



競技の奥深さは、選手同士が手を組んだ瞬間から始まっています。相手の力や反応を探り、自分に有利な展開へと持ち込もうとする。目の前の一瞬の勝負には、積み重ねてきた練習と、瞬時の判断が凝縮されているのです。試合の緊張感や迫力に引き込まれ、通りがかりに足を止めて観戦する人の姿も多く見られました。

■ 広島から参加。約10年ぶりの挑戦で準優勝

今回の大会には、広島から参加した小林さんの姿もありました。アームレスリングの大会に出場するのは初めて。素人部門の75kg超級に出場し、見事、準優勝を果たしました。



小林さんが出場を決めたきっかけは、競技未経験者でも参加できる大会があると知ったことでした。地元・広島で開催された大会は、情報を見つけたときにはすでに終了。そんなとき、福岡で大会が開催されることを知り、連休を利用して旅行がてら参加することにしました。腕相撲を本気でやるのは、約10年ぶり。普段は自宅で筋トレをする程度で、競技用のトレーニングを積んできたわけではありません。それでも勝ち進み、決勝に進出しました。

試合を終えた小林さんは、「10年ぶりぐらいに本気でできたから、すごく楽しかった」と話してくれました。新しい趣味を見つけたいという思いもあったそうですが、近くに道場がなく、本格的に始めるにはまだ迷いもある様子。それでも、素人部門があると知り、まずは出場してみようと一歩を踏み出しました。

試合を通じて、競技として鍛えられた選手たちとの違いも実感したといいます。手首の強さや瞬発力など、自分に足りないものに気づく一方で、競技としてのアームレスリングの奥深さにも触れたようです。

経験を積んだ選手が技術を競う一方で、初めて大会に出場する人にも挑戦の機会がある。小林さんの準優勝は、アームレスリングが新しい趣味や挑戦のきっかけになる可能性を感じさせてくれました。

私自身も、試合を撮影し、選手や主催者のお話を聞くうちに、このスポーツのファンになりました。

■ 競技の魅力を、もっと多くの人へ

大会終了後、参加者のおひとりからメールをいただきました。

「アームレスリングは競技人口が限られ、大会を開催できる会場も多くありません。今回、トリアス久山で大会を開催できたことは、より多くの方に競技を知っていただくための一歩になったと思います。本日は本当にありがとうございました。」

※個人情報に配慮し、メールの内容を一部編集しています。

この方は、大会当日の取材でも、多くの人が訪れる場所で大会を開催することは、アームレスリングを知ってもらうきっかけになり、大変うれしいと話されていました。

地域で活動する人々や、まだ広く知られていない競技を応援し、その魅力を多くの人に届けたい。これは、今回の大会に協賛したトリアスの思いです。競技を広めたいと願う主催者の思いと、それを応援するトリアス。今回の大会は、アームレスリングを知らなかった人が、競技に触れるきっかけにもなりました。

一瞬の勝負に隠された、技術と駆け引き。そして、その一瞬に賭ける選手たち。一瞬の力比べに見えるアームレスリングは、選手たちの想いと積み重ねた努力を競っているのです。

